

あべの観音だより

第79号

【発行所】

高野山真言宗 法真寺
あべの観音無憂山 法観寺
大阪市阿倍野区阪南町三十四一十七
電話 〇六（七五〇九）三八〇六



菩薩の用心は皆、
慈悲を以って本とし、
利他を以って先とす。

空海『秘蔵宝鑰』

お大師さま（弘法大師・空海 774 - 835）のお言葉を現代訳するならば「利他」することが自分自身に大きな幸せを感じれる人生へと変化していくのですよ。と伝えてくれています。

菩薩とは普遍する仏像など仏の菩薩ではなく『般若心経』にもあります「菩提薩埵」のことです。この菩提薩埵を略して菩薩と称し、わたしたち現世で生きている修行者のことを指します。細かいことは省略しますが、仏の道（苦しみのない人生）を歩む（見聞・聞法）の志を持つ人びとは皆、菩薩なのです。菩薩といえども大切なのは「利他」です。

この利他とは空海が日本で初めて使用した言葉でもあります。また延暦寺で有名であり、最澄も「忘己利他」として有名です。

この最澄と空海が「利他」という言葉が今から一二〇〇年前、平安二宗という平安時代初頭の屈指者ともしえるお二人が仏教の中の密教を日本へ齎し登場しました。経典群には同じ意味合いのことは多々記されています。

利他とは「他様へ利益を施す行為」を意味します。いわゆる自己よがりにならない心構えです。自己

中心的・自分勝手・利己的などが対義語となります。

前置きが長くなりましたが、空海は菩薩の心はすべて慈悲（拔苦与楽）を基本とし、まず人の為を先に考えることを伝えていきます。また最澄（776 - 822）の「忘己利他」も同義でもあり、最澄著『山家学生式』に「己を忘れて他を利用するは慈悲の極みなり」とあり、自分のことを後回しにして、他者の利益のために尽くすことを意味します。

人間はついつい自分を優先しがちですが、我が子などの身近な関係であれば優先できるように、人は人だけに支えられているのではなく万物によっても支えられており、たとえば「米」という字は「八十八」という文字からつくられています。お米の芽から収穫、そして私たちの手元に届くまでには88回もの手間をかけられていることを意味します。

わたしたちは「利他」という他者様へ利益となる行為（身体・言葉・意識）を赴かなければ為らないとするのが仏教の根幹です。他者の喜びを自分の喜びとすることを随喜功德とも称します。

他者が喜びをもたらしたとき他者は感謝や恩返し of 気持ちが芽生えます。そうすることで見返りのない行為はやがて自らの徳へと成り、自利利他円満（自分も他者もすべてが満たされる）ことへととなります。

今回はある新聞記事で紹介され、多くの反響をもたらし続けている記事をご掲載させていただきます。「利他の神髄」といっても過言ではないほど良い記事です。

一生を終えてのちに残るのは

会社員 野崎 佳宏

（神奈川県 50）

20歳のころ、三浦綾子さんの小説を夢中で読みました。「続氷点」に「一生を終えてのちに残るのは、われわれが集めたものではなくて、われわれが与えたものである」という言葉が出てきます。

当時はよく理解していませんでした。お金がたまれば車を買、家を買い、果てしないコレクション魂が人間の悲しい性ではないかと。

20代後半で父が、数年後に母が他界しました。苦労を重ねた両親の人生は何だったのか。かわいそうに思えてきました。いずれ身内や友人も

この世から消え、両親が人々の記憶からも消えていくことが。

30代後半になり、あの言葉を思い出しました。手元に「集めた」ものは、自らの死とともに消えてなくなるでしょう。でも、「与えた」ものはそうではないと考えるようになりました。両親から受け取った有形無形の施しを、自らの肥やしにするだけでなく、たすきリレーのように次の世代に伝えていく。これこそ、自分が生を受けた意味なのかもしれない。

自分のしがない人生は、何百万年と続く人類の営みのほんの一瞬です。残したいものは何なのか。考えながら子どもと接する日々です。

一樹の陰一河の流れも他生の縁

わたしたちは日常で見知らぬ間に多くの人びとと交差していますが、少しでも袖など触れ合うものならば、それは偶然ではなく昔からの遠い不思議な縁より縁があるということですよ。

見知らぬ者同士が同じ木の陰で雨宿りをしたり、同じ川の水を飲み合ったりするような、ちよつとした出来事も前世からの因果縁（原因＋縁＋結果）という因果律（常々連鎖的な事象など）によるもので、そこに気づき大切にすべきであるという仏教の教えです。

不思議な縁に導かれて、今、わたしたちは存在している

すべての起こり得ること、人生は“縁”によって起こることを如実に（ありのまま）に観ていくことで、誰もが人生に変化が芽生えていきます。仏教ではすべては「因果の法則」より心の在り方となり、その神髄は「意思力」です。

座右の銘を持つことで
自身の軸がブレにくく
成っていくのです。

かの旧・松下電器産業の創設者（現・パナソニックホールディングス）であり、和歌山県出身、経営の神様とも異名をもつ松下幸之助氏（1894-1989）も利他こそ肝要であることを常々伝えていきます。松下幸之助氏の『道をひらく』（PHP 研究所・1968）から“利他”のこと

を書かれた文章を引用させていただきます。

生かし合う（相互礼拝）



人間の生命は尊い。尊いものは誰もが尊重しなければならぬ。ところが、自分の生命の尊いことはわかっていても、他人の生命もまた尊いことを忘れがちである。ともすれば私心に走り私利私欲が先に立つ。つまり、自分にとらわれているということ、これも人情としてやむをえないことかもしれない。

しかし、これでほんとうに、おたがい相互の繁栄は生まれられないであろう。人間本来の姿は生かされないであろう。

やはり、ある場合には自己を没却して、まず相手を立てる。自己を去って相手を生かす。そうした考えにも立ってみなければならぬ。そこに相手も生き、自己も生きる力強い繁栄の姿がある。尊い人間の姿がある。

自己を捨てることによってまず相手が生きる。その相手が生きて、自己もまたおのずから生きるようになる。これはいわば双方の生かし合いではなからうか。そこから繁栄が生まれ、ゆたかな平和と幸福が生まれてくる。

おたがいに、ひろく社会の繁栄に寄与するため、おたがいを生かし合う謙虚なものの考え方を養いたい。

松下幸之助氏

生かせるのち



令和七年度 盂蘭盆会併修施餓鬼会法要

高野山真言宗 法真寺

あべの観音 無憂山 法観寺